このｐｄｆは野間秀樹編著『韓国語教育論講座』第1巻（くろしお出版．2007年）の内容見本です．ISBN 978-4-87424-374-9．無断引用はご遠慮ください．『韓国語教育論講座』の詳細は次をごらんください．http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/edu_top1.html

音韻論からの接近

野間　秀樹（のま・ひでき）

1．音声学と音韻論

ことばがやりとりされる場において，に発せられた１まとまりのことばを発話(utterance/발화)という．ある発話が言語音によって発せられるとき，それら全ては音声学の研究対象となりうる．人間のそうした言語音(speech sounds/언어음)をめぐる様々な問題を扱う学問分野を，音声学(phonetics/음성학)と呼ぶ．音声学が言語音そのものをめぐる問題を扱うのに対し，音韻論(おんいんろん)(phonology/음운론)は，さらに抽象された平面(仏語：plan)[1]の学問である．音声学がいわば自然科学的な性格も濃厚に持つ，実践的な学問分野である一方で，音韻論はむしろ理論的に構築してゆく分野である．

音韻論では多くの考え方が提起されている．[2] 本稿ではそれらを逐一見てゆく余裕はないし，また韓国語教育においてそこまで要求されるわけではない．本稿では韓国語学と韓国語教育に必要な音韻論的な考え方の基礎のうち，音素についての考え方を扱う．韓国語の音韻論的な現象を見ながら，同時に音韻論一般への入口へ立つことを目標とする．

音韻論の基礎を把握することは，韓国語学はもちろん，韓国語教育にとって不可欠の要諦である．とりわけ実際の音声の平面と，音韻論の平面，また次の稿で見る形態音韻論と呼ばれる平面，さらに文字の平面を正しく区別して扱うことなしに，韓国語教育，とりわけ文字と発音の教育はありえないといってよい．他方で，音韻論から見たハングルの表記システムは，韓国語学や韓国語教育にとってのみならず，広く言語学に関心を寄せる人々にとっても，極めて刺激的な内容を

---

1) この仏語 plan，露語 план という単語はフランスやロシアの言語学ではしばしばこうした「平面」といった意味で用いられる．例えば木下光一訳のバンベニスト(1983:148)などを参照．同書原本からのの英語への Meek 訳の Benveniste(1971:133)では plane とされている．

2) 一般音韻論の歴史や理論を知るためには，小泉保・牧野勤(1971;1979[5])，大橋保夫(1977)，橋本萬太郎他(1977)，ヨーアンセン(1978)，柴谷方良・影山太郎・田守育啓(1981)などを参照．音韻論の古典といる Trubetzkoy（トルベツコイ）(1939;1958[2];1989[7])には日本語訳である長嶋善郎訳(1980)，英語への Christiane 訳(1971)もある．なお，中国語学研究会編(1969;1979[5])などで，中国語の音韻論のみならず，現代音韻論とはまた違った観点から，中国音韻学を覗いてみるのも面白いであろう．

提供してくれるものである．

なお，参考文献の一覧は本稿と形態音韻論に関する次の稿の末尾で一括して示すことにする．

2. 音素

2.1. 音韻論的対立と音素

ある1つの言語内において，意味を区別する最小の音の単位を音素(phoneme)あるいは音韻という．音素をめぐる諸問題は音韻論で扱われる．日本語の次の2つの単語を見てみよう：

[derɯ]　(出る)
[terɯ]　(照る)

上の2つの単語において，後ろの[erɯ]の部分は共通しており，頭の[d]と[t]の部分だけが異なっている．アクセントの型も同じである．そしてこの[d]と[t]は，これ以上小さな言語音の単位に分割できない．つまり[d]と[t]の〈対立〉(opposition)[3]によってのみ，これら2つの単語の意味を区別していることになる．この/d/や/t/のように，それだけで単語の意味を区別する音の単位を音素あるいは音韻と呼ぶ．そしてこうした/d/や/t/のような対立を音素的対立(phonemic opposition/음소적 대립)，あるいは音韻[論]的対立(phonological opposition/음운론적 대립)という．音韻論的対立を利用すると，意味を区別する最小の単位である音素を取り出すことができるわけである．

また音韻論的対立を成す，2つ以上の単語の対を，最小対(minimal pair/최소대립쌍)という．[derɯ]（出る）と[terɯ]（照る）は日本語における最小対の例である．さらにこれに[kerɯ]（蹴る）を加えれば，/k/も音素として取り出せる．[serɯ]（競る）が例に上がれば，/s/も音素に加えることができる．子音だけではない，[kerɯ]（蹴る）の母音を取り替えて，[kirɯ]（切る）とやれば別の単語になる．従ってこの/e/や/i/という母音も日本語にあっては音素の1つであ

3) この対立という概念は音韻論のみならず，文法論などにも広く応用される考え方である．de Saussure(1916;1972:167)，その日本語訳，ソシュール(1940:160)，更にその改版であるソシュール(1940;1972:169)，Trubetzkoy（トルベツコイ）(1939;1958[2];1989[7])やヤーコブソン，ハレ(1973)を参照．

る．

言語学的な記述においては，実際の音声をIPAでは[ ]（ブラケット/square bracket）[4]という括弧に入れて表記するのに対し，音素は上でも用いたように，/ /（スラッシュ/slash mark/빗금）に入れて，/d/や/t/，/e/や/i/のように示すのが慣例である．[5] 音素を表記するには，ローマ字やIPAの記号のみならず，韓国語であれば，/ㅏ/や/ㄱ/といった具合に，可能な範囲において，ハングルなどの文字を用いてもよい．韓国語の平音/ㅂ/，激音/ㅍ/，濃音/ㅃ/などは，ローマ字だけでは足りないので，補助記号を用い，例えば/p/，/ph/，/p'/のように表記したり，[6] ギリシア文字π（パイ）やβ（ベータ）などを用いて，例えば/b/，/p/，/π/などのように表したりもする．[7] また単独の音素だけでなく，音素表記，つまり音素で表記した単語などを，/デル/や/deru/のように表記することも行われるが，表音文字以外を使用した，/出る/のような表記は用いない．今一度，音素の概念を確認しよう：

音素＝ある言語体系において意味を区別する最小の音の単位[8]

---

4) この“[ ]”（ブラケット）は印刷術では「大括弧」と呼び，“〔 〕”は「亀甲」（きっこう）と呼んで区別している．韓国語の正書法“한글 맞춤법”では“〔 〕”“대괄호”と呼ぶが，“[ ]”は現れない．なお，音韻論などの記述においては，単語の綴りを表記する際は，日本語なら「」，韓国語なら引用符の“ ”(작은따옴표) や““ ”” (큰따옴표) などで表記し，音声表記の“[ ]”，音素表記の“/ /”とは区別するのがよい．

5) 例えばライオンズ(1973;1986[5]:108)でもこうした表示を「習慣になっている」とする．なお，日本や韓国の多くの英和辞書，英韓辞書などでは[ ]で発音を示しているが，多くは細かな異音(2.4.参照)まで扱った音声表記というより，音素的な表記となっていることが多いので，注意が必要である．

6) 例えば国際音声学会編(2003:163)で Lee, Hyun Bok(이현복)は平音/ㅂ/，激音/ㅍ/，濃音/ㅃ/をそれぞれ/b/，/ph/，/p/と表記し，Sohn, Ho-min(1994:432)ではそれぞれ/p/，/ph/，/p'/としている．

7) 例えば梅田博之(1989:953)では濃音の音素/ㅃ/に/β/を用いて，平音を/b/，激音を/p/，濃音を/β/と表している．このように同じ/p/と表しても，平音であったり，激音であったり，濃音であったりと，論者によって様々なので，注意を要する．

8) 古くは音素を心理的な単位と見る考え方もあったが，音素のこうした機能主義的な定義は主流となったといえる．“a minimum unit of distinctive sound-feature”（弁別的な音特徴の最小単位）と音素を定義した Bloomfield(1933;1984:79)などをはじめ，今日まで概ね定説と見てよい．Trubetzkoy（トルベツコイ）(1939;1958[2]; 1989[7]:34)などでは音韻論的対立を先に述べ，音韻論的な最小の単位という形で定義しているが，これらも軌を一にする．ライオンズ(1973;1986[5]:119)でも「同じ環境にあって，異なった単語を